



2015年度 エチオピア 教師海外研修報告書



独立行政法人 国際協力機構（JICA）四国支部

【後援】外務省、文部科学省

香川県教育委員会、徳島県教育委員会、高知県教育委員会、愛媛県教育委員会

目 次

教師海外研修とは？

■ 教師海外研修の目的／応募条件／派遣期間／募集時期／2015 年度の研修国 「エチオピア」について	1
■ 教師海外研修のながれ	2
■ 海外研修日程	3
■ 海外研修レポート	4
■ 同行者より	19
■ 参加者氏名	20

JICA 四国支部 教師海外研修とは？

■教師海外研修の目的

JICA は、諸外国との関係や異文化理解の学習について、国際協力を通じて培った経験や人材、ネットワークを活用し、積極的に支援を行っています。この教師海外研修は国際理解教育／開発教育に関心を持つ教員を対象に、実際に開発途上国を訪問することで、開発途上国が置かれている現状や国際協力の現場、開発途上国と日本との関係に対する理解を深め、その成果を次代を担う児童・生徒の教育に役立てていただくことを目的として実施します。帰国後は、海外研修で得た経験を授業等を通して生徒に伝え、生徒の国際理解を推進していただくことを目的としています。

■応募条件

四国 4 県の国公立・私立の小学校、中学校、高等学校、中等教育学校、高等専門学校、特別支援学校教員及び教育委員会の指導主事等で、応募締切時点で年齢が原則 50 歳以下であり、所属長または教頭の推薦が得られる方（JICA から海外に派遣された経験のある方は除きます）

■派遣時期

8 月 11 日（火）～8 月 21 日（金）

※派遣時期は、実施年度により変わります。

■募集時期

毎年 4 月上旬から 5 月中旬

※毎年、四国内全ての学校に応募要項をお送りしています。

■2015 年度の研修国「エチオピア」について

(1) 正式名称

(和文) エチオピア連邦民主共和国

(英文) Federal Democratic Republic of Ethiopia

(2) 政体 連邦共和制

(3) 人口 約 9、173 万人 (2013 年：世銀)

人口増加率 2.61% (2013 年：世銀)

(4) 首都 アディスアベバ

(5) 面積 109.7 万平方キロメートル (日本の約 3 倍)

(6) 民族 オロモ族、アムハラ族、ティグライ族等約 80 の民族

(7) 言語 アムハラ語、英語

(8) 宗教 キリスト教、イスラム教他

(9) 一人当たり GDP 374 億米ドル (2013 年：世銀)

(10) 農業 (穀物、豆類、コーヒー、油糧種子、綿、チャット〈エチオピア原産の常緑広葉樹〉、サトウキビ、ジャガイモ、花卉、皮革〈牛、羊、山羊〉)

【参考】「外務省ホームページ-各国・地域情勢-」外務省





教師海外研修の流れ

参加決定から報告会まで、1年間にわたる研修の流れをご紹介します。

6月

国内事前研修

国内事前研修～海外研修に向けた準備～

国内事前研修では、JICAやODAについての知識に加え、訪問国の現状、開発課題等への理解を深めるとともに、現地研修での「視点」について考えます。また、研修後の授業立案に向けて国際理解教育・開発教育を実践するためのスキルアップを図ります。



8月
中旬

海外研修

海外研修～帰国後の授業に向けた素材集め～

JICAプロジェクトサイト・JICAボランティア活動現場・現地の学校の視察や、現地マーケットで教材研究のための素材収集等を行います。



9月

国内事後研修

国内事後研修～授業実践に向けた準備～

海外研修を振り返りながら、それぞれの情報を共有します。今後、授業でどのように伝えていくか、アイデアを出し合いながら参加者全員で授業計画を考えます。



9月
1月

授業実践

授業実践

それぞれの学校で国内・海外研修での学びを活かした授業を実践していただきます。子どもたちが、何を知り、どう行動するようになるか、海外での経験と国内での研修の成果をいかに発揮しましょう。

2月

報告会

報告会&国際理解教育セミナーでの報告

「海外研修で何を学び、どう授業に活かしたか」を参加者間で情報共有し、「その授業で子供たちが何を学び、どんな変化が見られたのか」など国内外での研修の成果を報告します。



研修参加後は、所属校で継続的に授業を行い、四国の国際理解教育・開発教育を推進する中核となって活躍していただきます。

海外研修日程

日順	日付	プログラム	滞在先
1	8月11日 (火)	関西空港発 (23:40 発)	日本 (機内泊)
2	8月12日 (水)	関西国際空港→ドバイ→アディスアベバ空港着 (13:30) JICA エチオピア事務所訪問 ・ JICA エチオピアの事業概要説明 ・ 安全対策・健康管理ブリーフィング	アディスアベバ
3	8月13日 (木)	・ 教育セクター説明 (JICA事務所) ・ 連邦教育省理数科教育改善センターでの意見交換 ・ 教材収集 【青年海外協力隊活動現場視察】 ・ 生産性向上センター	アディスアベバ
4	8月14日 (金)	【無償資金協力】 ・ 国道一号線アワシュ橋架替計画	アワシュ
5	8月15日 (土)	アディスアベバからジンマに移動 (約7時間) ・ サバカコーヒー協同組合訪問 (ベレテゲラプロジェクト) ・ 青年海外協力隊員、JICA 専門家との意見交換会	ジンマ
6	8月16日 (日)	ジンマからボンガに移動 (約3時間) ・ バルタの滝トレッキング ・ ハチミツ農家訪問 (農家に立ち寄り・交流、コーヒーセレモニー体験) ・ 青年海外協力隊員との意見交換会	ボンガ
7	8月17日 (月)	・ ボンガ地域の子供とのふれあい@バルタ小学校 ・ コーヒーフォレスト散策 【青年海外協力隊活動現場視察】 ・ コーヒー博物館の見学0	ボンガ
8	8月18日 (火)	ボンガからアディスアベバへ移動 (約10時間)	ボンガ アディスアベバ
9	8月19日 (水)	【技術協力プロジェクト】 ・ エチオピアカイゼン機構 (EKI) 訪問 ・ カイゼン実施企業 Peacock (革製品) 視察 ・ 市内観光 (国立博物館)	アディスアベバ
10	8月20日 (木)	・ 帰国報告会 (JICA エチオピア事務所) ・ アディスアベバ発 (16:10 発)	アディスアベバ (機内泊)
11	8月21日 (金)	関西空港着 (17:30 着)	日本

海外研修レポート

1日目、2日目 2015年8月11日(火)

- 1) 記録者：浪越 綾
- 2) 訪問先：エチオピア共和国
- 3) 研修内容：
 - 空路移動関西国際空港→ドバイ→アディスアベバ空港
- 4) 所感：

JICA 教師海外研修へいよいよ出発の時を迎えた。体調を完全に、1つでも多くの見聞を得られるように取り組みたいと改めて考えた。高知県から関西国際空港までの道のりも長かったが、エチオピアに到着するまでに所要時間 20 時間程要するので、ドバイ空港の様子なども楽しみながら過ごしたいと考えていた。ドバイ空港は早朝に到着したにも関わらず大変な賑わいで、様々な国の人々が行きかっていた。エチオピア行き搭乗口に近づくにつれて観光客の数が減り、出稼ぎに出ていて帰省をするのではないかと思われる、沢山の荷物を持った人々が増えていた。いざ搭乗手続きが終わり座席について離陸の時を待っていると、機内に乗り込むまでにすでに泥酔をしている初老の男性がおり、また指定の座席以外に座っている客が数名いた。機内サービスで手渡されるおしぼりは水が滴るようなもので、さすがに私の横に座っていたエチオピア人男性も、客室乗務員に苦情をいっていたが、「外は暑いからいいのよ」という客室乗務員の返答であり、短時間の間に日本ではあまり見かけないような状況に出くわすこととなった。

エチオピアが近づくにつれて、窓からは赤茶の大地から緑が見られるようになった。先ほどの隣席のエチオピア人男性が、機内販売で女性用のアクセサリと、時計を購入していた。話をしてみると出身は私たちが今回の研修で訪れるジンマだそうで、家族がジンマに住んでいると誇らしそうに話をしてくれたのが印象的であった。彼はパソコンプログラマーの仕事をしており、中国に仕事で行っていたということであった。客室乗務員とのやりとりから家族や大切な人に、土産を買っているのだなと感じた。エチオピアに降り立った時には日付も変わっていたが、入国手続きが終了するまで1時間程並んだ。旅に待ち時間はつきものである。空港ではフレッシュな J I C A 職員の阪本さんが出迎えてくださった。アディスアベバに着いた最初の感想はビルなどの高層建築も見えるが、緑豊かな山々が見え美しい街だというものであった。



関西国際空港 出発前



ドバイ空港



アディスアベバ空港

2日目 2015年8月12(水)

- 1) 記録者：松田 依子
- 2) 訪問先：アディスアベバ空港 → ホテル → JICA エチオピア
- 3) 研修内容：
 - JICA エチオピア事務所 神所長面談
 - JICA エチオピア事務所 佐藤次長と OJT 阪本さんによる全体ブリーフィング
- 4) 所感：

初めて降り立つ空港は、特別な香りがするものだ。どやどやと空港から出て行く人の流れ。明らかに黒人の方が多い。ああ、エチオピアに来たんだ、今日から研修が始まるんだという思いで胸が高鳴った。

空港を出ると、2台の貸し切りバスに別れて乗ることになった。そのとき、スーツケースの積み込みを手伝ってくれた地元の男性たちがいた。なんて親切な空港職員だろう、と思っていたが、バスのエンジンがかかる時、何やら



アディスアベバ空港



滞在したホテル

バスの窓に向かって要求している。お礼をしろということらしい。日本には無い光景に、私はドキッとした。これから始まる日々に、小さな恐怖を感じた瞬間だった。

空港からしばらく行くと、ホテルに着いた。比較的賑やかな通りにある便利な場所だ。荷物を置いてバスに乗り込み、早速 JICA エチオピア事務所に向かった。車窓に映る景色は、何もかもが新鮮だった。道路にはかなりのスピードで車が行き交う。日本の有名メーカーの車も多い。かなり使い込まれているようで、黒い排気ガスを吐いていた。信号はほとんどない。歩行者は車の流れをみながらタイミングよく道を渡っている。建設途中の建物が多く、目覚ましい経済発展の様子をうかがうことができた。

JICA 事務所に着くと、神所長との面談を行い、参加した9名が、今回の研修への抱負を語った。所長からは、自分がスポットを当てて学びたいと思ったことについて、ぜひ現地の方々と話をして

ほしいということであった。また、佐藤次長からのブリーフィングがあり、健康管理、安全管理の必要性について説明を受けた。アディスアベバは標高が2400m あるため、高山病にならないためにも1日2ℓの水分補給をすること、しっかり睡眠をとること、スリや置き引きに気をつけること、移動する前には貴重品があることを確認するようにとのことだった。

日本とは違うエチオピアでの研修を、安全に気をつけて、より充実したものになりたいと強く思った1日であった。



ブリーフィングの様子

3日目 2015年8月13日(木)

- 1) 記録者：梯 泰三
- 2) 訪問先：JICA エチオピア事務所、連邦教育省理数科教育改善センター、シロメダ、生産性向上センター
- 3) 研修内容：
 - 教育セクター説明（JICA エチオピア事務所）
 - 教育分野の意見交換（連邦教育省理数科教育改善センター）
 - 教材収集（シロメダ）
 - JOCV 活動視察（生産性向上センター）
- 4) 所感：

エチオピアに到着した2日目には、上記の4つの研修を行った。以下に、それぞれの研修について記録者の所感を述べてみたい。

①教育セクター説明について

JICA 事務所の奥川企画調査員より、エチオピアの教育について説明をして頂いた。その説明を基に、エチオピアの教育制度を纏める。初等教育(Primary Education)8年間は、第1サイクル(7歳~10歳)と第2サイクル(11歳~14歳)から成る。第2サイクル終了時には、PSLCE(Primary School Leaving Certificate Examination)が実施される。その後、第1サイクル中等教育(First Cycle Grade: General Secondary School)へと進む。第1サイクル中等教育は、15歳と16歳を対象とし、終了時の全国試験 EGSECE(Ethiopian General Secondary Education Certificate Examination)の結果によって、2種類の上級学校へと進学が可能である。2種類の上級学校とは、第2サイクル中等教育(Second Cycle Grade: Preparatory Secondary School)と、技術職業訓練校 TVET(Technical and Vocational Education and Training)である。第2サイクル中等教育は、大学への進学を目的とし2年間(18歳と19歳)の修学期間となっている。大学入学試験は、EHEECE(Ethiopian Higher Education Entrance Certificate Examination)と呼ばれ、その結果により進学する大学が決定する。また技術職業訓練校は、5つのレベルから成る。

ここからは、教育の現状について纏める。2010年の教育予算は政府予算の24.5%を占めている。この割合は、他国と比べると非常に高いことから、教育に尽力をしているとして世界的に評価を受けている。また初等教育の就学率は、20.4%(1996)から95.5(2013)へと向上している。政府予算に占める教育予算の割合と初等教育の就学率向上から、エチオピアの教育を捉えると国全体としては、量的に改善をしたと言える。その一方で、教育格差が存在し、エチオピアの教育の課題となっている。教育格差には、地域格差と男女間格差に顕著に見られる。

記録者の管見であるが、日本においては明治の学制や教育令以後に急速に初等教育の就学率が向上した時期がある。1880年代の50%から1900年代に100%へと向上した。ささやかな立身出世主義が、この就学率の向上を齎したと言われることがある。エチオピアも20年足らずで急激な就学率の向上を成し遂げている。この原動力は何であったのかを、これから学んでいきたい。

ここまでエチオピアの教育について纏めてきた。詳細な情報については、エチオピア教育省がWeb上で公開をしている Educational Statistics Annual Abstract を参照されたい。

②教育分野の意見交換について

連邦教育省理数科教育改善センターを訪れて、教育分野の意見交換を行った。同センターは、教

育省傘下の組織でエチオピア全土の理数科教育の改善を担当している。ここでは、元セカンダリースクールの教員であるセンター長の Mr. Belaynth より、現在進行中の LAMS (Learning Achievement in Mathematics and Science) プロジェクトについて話を伺った。エチオピアでは、国家試験対策のために、知識を獲得することに偏重した授業が行われてきたそうである。LAMS は、国家試験の内容を改善することにより、理数科教育における生徒の学びの質を向上させることを目的としている。

記録者は、日本の学校においても、入試対策つまり知識を獲得することだけに多くの授業が費やされていると感じることがある。その一方で、生徒の授業への興味関心や課題解決に向けた見方や考え方も重要とされ、それらの育成が教育の目標となっている。日本の教師たちは、試験内容と教育目標の乖離に悩んでいると思う。LAMS の国家試験内容の改善により、生徒の学びの質を向上させようとする取り組みは、日本の教育についても示唆をしているように感じた。

また、LAMS では Lesson Study も行っており、Mr. Belaynth から日本の Lesson Study についての質問があった。記録者は、日本（自分自身）の Lesson Study について説明をすることができなかった。自分の勉強不足を痛感した。事前に意見交換があることは分かっていたので、日本の教育について意見を述べられるように準備しておくべきだったと思った。ところで、同センターで初めてエチオピアのコーヒーセレモニーを体験した。エチオピアの文化を肌で感じることができた。

③教材収集について

シロメダという、商店が多く立ち並んだ地域で、エチオピアに関する教材収集を行った。女性向けの衣装や食器などが多く販売をされていた。筆者はアムハラ語のアルファベットと数字がデザインされたシャツを購入した。それを教材として使用したいと考えている。

④JOCV の活動視察について

山田隊員（自動車整備）と金子隊員（皮革工芸）の 2 名の JOCV を訪れた。山田隊員からは、エチオピアでは、古い車を修理しながら使い続けていることを知ることができた。また、自動車整備の知識や技術を習得するためには、読み書きと共に基本的な計算や長さの概念が必須であることを伺った。山田隊員の話から初等教育の重要性を再認識できた。

金子隊員からは、JOCV になった動機を聞くことができた。中学生の頃から海外への興味関心があったことと、家族（母）が大きな支えになって JOCV になることができたと言ってくれた。金子隊員は、皮革工芸の技術を、就職後に習得したそうである。現在も、皮革工芸の勉強中で未熟だと謙遜をされていたが、金子隊員の工芸品はとても素敵で温かみがあったと感じた。



JICA 事務所にて



生産性向上センターにて

4日目 2015年8月14日(金)

- 1) 記録者 : 河野 通之
- 2) 訪問先 : 新アワシュ橋
- 3) 研修内容 :
 - 新アワシュ橋の建設の経緯やプロジェクトの概要についての説明
 - 実際に新アワシュ橋までいき視察
- 4) 所感 :

海を持たない内陸国のエチオピアでは、ジブチの港と結ぶ国道はまさに生命線ともいえる重要な道である。アワシュまでの道はアディス近郊の風景とは変わって、荒涼とした風景が続き、日本人が一般的にイメージするアフリカに近い感じがした。自然公園の中を通過するというのもあり、ライオンやキリンなどの姿を期待したが、残念ながらこのあたりには生息していないということである。途中利用した高速道路や建設中の鉄道はほとんどが中国資本であり、日本とは桁違いの資本投下であるといわれる中国の圧倒的なパワーを実感した。

アワシュは古くからの要衝であるため新アワシュ橋をふくめ4つの橋を見ることができた。一番古い橋は約100年前にフランスが作った鉄橋である。鉄をふんだんに使った幾何学的なデザインは重厚で威厳があり、歴史を感じさせる。

二つ目の橋は40年前にイタリアが作ったもので、現代の橋とほぼ同じ構造であることが外観から見て取れる。この橋の老朽化によって建てられたのが、今回視察した新アワシュ橋である。岩盤が深いため、当初の予定より時間がかかり、建設費も日本円にして12億円にのぼったそうである。コンクリート以外の建設資材は日本から輸入し、コンクリートに素繊維を練り込んでつくるという最新の技術で作られた。そのため薄く軽量に作ることができ、建設条件の良くないこの地域にふさわしいものになった。26人の日本人が現地の方と共に建設に加わり新アワシュ橋は完成した。私たちは歩いて通ることができたが、感触は日本の高速道路のようで改めてジャパノリティのレベルの高さを実感した。橋のたもとには日本とエチオピアの有効の証であるとともに、無償供与であることが刻まれたレリーフがあり感慨深いものがあった。この橋の通行量は現在は2000台程度であるが、7000~8000台の負荷にも耐えられる設計である。

じつは、アワシュには建設中のもう一つの橋がある。それが中国によって建てられている鉄橋である。中国はエチオピアとジブチを鉄道で結ぼうとしているのである。もし完成すれば、物資の輸送量は飛躍的に向上し、エチオピアにとっては大きな恵みとなるであろう。その時は我々が目にした新アワシュ橋も過去の異物になっているのかもしれない。帰る間際ふとそんな気になった。



フランスとイタリアが建設した橋



日本のODAによる新アワシュ橋



友好のレリーフ

5日目 2015年8月15日(土)

- 1) 記録者：山本葉子
- 2) 訪問先：移動日（アディスアベバ→ジンマ）、サバカ農協
- 3) 研修内容：

- サバカ農協視察

藤崎専門家、西川専門家と合流し、コーヒープロジェクトの説明を受ける。また、コーヒーセレモニーを体験する。

- 専門家、隊員と懇談

金河隊員、岡本隊員、塚原隊員も交えて懇談。

- 4) 所感：

佐宗企画調査員（JICA）、井堀さん（インターン生）と合流し、約7時間かけてジンマに移動する。アディスアベバから南へ、ジンマまで移動する道はアメリカの援助によって造られた一本道で、舗装された立派な道が広大な台地を縦断していた。反対側は、歩いてどこかに向かう人々、荷物を積んだ馬やロバたち、未来のオリンピック選手らしきランナーたちが行き交い、私たちの目を楽しませてくれた。しだいに緑が豊かになり、土壁の家やわらぶき屋根の家、コンクリートの家などさまざまな様式で建てられた家が顔を覗かせた。ただ、どの家にも電気が通っている様子がないので、私たちは人々の生活を思い思いに想像していた。単調なバス移動も眠るのが惜しいので、たっぷり車窓を楽しんだ。

夕方はサバカ農協の組合員宅でコーヒー栽培の説明を受けた。森林保全を行ないながら栽培するコーヒーは高品質で、国際マーケットではプレミアがついている。アメリカで行なわれるコーヒーのイベントで入賞したり、品評会で入賞したり、ジンマコーヒーは生産者のプライドをかけて世界中に売り出されている。私たちはコーヒーセレモニーも体験した。コーヒーは煎りたて、挽きたて、入れたてがもっとも美味しいとのこと。手作りのはちみつ&パンをいただきながらジンマコーヒーを思いっきり堪能した。

夜はみなさんを交えての懇親会。クルクルと巻かれた初のインジェラ（主食）が登場する。照明が暗くてよく見えなかったが、酸味の効いたインジェラは忘れられない。



ロバたち



私たち

6日目 2015年8月16日(日)

- 1) 記録者: 金澤 敦子
- 2) 訪問先: ボンガにてバルタの滝、養蜂農家 (ムルース氏) 訪問
- 3) 研修内容:

- バルタの滝へトレッキング

平山隊員、萩原隊員、牧隊員、大塚隊員と合流

- ハチミツ農家訪問

ガーデン・養蜂場見学。コーヒーセレモニーを体験し、ムルース一家と交流。

- 4) 所感:

ジンマを出発し約3時間でボンガに到着。途中、野生の大きな猿が運転中のドライバーの横の窓に飛び乗のるというハプニングが発生。ジロリと車内を見渡す様子に、もし飛びかかってきたら…と皆、息をのんでしばらく見つめていた。内山さんがトウモロコシを渡すと納得して(?)飛び降りてくれたが、自然の中では起こることは予測ができないと実感する。私たち人間が山を切り開き、道路ができ、車や人々が往来するようになって、猿たちの生活や食べるものも変わってきたのだろう。

ボンガに到着後、協力隊員の4名の方と合流し、昼食にインジジェラを頂く。思っていたより食べやすく、エチオピアに来たことを実感する。

昼食後、ボンガの滝へ向けて出発する。果たして無事に滝まで到着できるかどうかと心配していたが、天候にも恵まれ、ぬかるんだところも多くなく、美しい緑の中ひたすら滝を目指した。途中、現地の子供が手をひいてくれる姿もあった。そしてとうとう滝が目の前に！高所から流れ落ちる滝は絶景で、また下方には虹ができており、その美しさ壮大さに言葉を失いただ見つめていた。滝から自然のミストを浴び、生き返ったような気持ちになって、帰り道も頑張ることができた。

そしてハチミツ農家のムルース家に到着。エチオピア風の肩を合わせる挨拶で出迎えて頂く。火を起しコーヒーを洗うところからコーヒーセレモニーが始まる。生豆を煎るとコーヒーのいい香りが私たちを包む。豆を煎る間に庭を案内していただく。庭には、様々な植物、コーヒーの木、ニセバナナの木、スパイス、そして養蜂のための巣箱と、自然の状態を大切にしながら収穫をしている。お話を聞いていると、自分たちの生産物にとっても誇りをもっていることが伺えた。コーヒーの焙煎が終わると杵と臼で潰して粉状にする作業だ。実際にやらせてもらうととても難しい。手を上の方まであげて振り下ろすのは、見ていると簡単にやっているようだが、上手くできない。こちらではコーヒーセレモニーは女性が執り行い、小さい頃から練習するという。コーヒーを砕く音で、その女性が上手か下手かが村の人々にわかるようで、うまくできることがいいお嫁さんになる大事な条件であるようだ。手作りのハチミツつきパンとともに、挽き立てのコーヒーをいただく。日本で飲んでいるより少し濃い味がするがとても美味である。



バルタの滝



ハチミツ農家の看板

丁寧に煎って砕いているところも見ているから、余計においしく感じるのかもしれない。ハチミツも白くて濃厚で、自然の甘さで口の中がいっぱいになる。花によってハチミツの色が変わるとのことだ。丁寧に作られたハチミツを皆が購入した。

途中でお父さんと、娘さんの旦那さんが帰ってこられた。ここで農家の皆さんに日本茶を飲んでいただく。松田先生が日本から茶道道具一式を用意し、日本の“グリーンティーセレモニー”を楽しんでいただけるように準備していたのだ。お菓子の金平糖にも喜んでいただき、日本茶も堪能していただいた。お父さんは日本のこともよくご存じでNHKも見ているとおっしゃっていた。協力隊員の方々と心の通ったつきあいをされていて、平山さんのことは”My child”と呼ぶほどである。協力隊の皆さんは、現地の人々と共に暮らしながら信頼関係を作っており、それが、開発の成功の鍵になっているのだと実感した。そしてエチオピア人が日本に対して友好的に感じているのも、こちらで働く人々のおかげである。

お父さんはたくさんのお話を話して下さった。「黒人も白人も黄人も、みんなで一緒に平和を作ろう。」「日本もエチオピアも共に繁栄しよう。」「私たちにただ魚を与えるのはやめて下さい。魚の取り方を教えて下さい。」「カファの地域から10キロ以上離れたことがないということですが、広い視野でエチオピアや日本を見ているお父さん、そして一家の皆さんに感銘を受け、立ち去りがたい思いでここを後にし、ホテルに向かった。

夕食では、協力隊の皆さんにやりがいや苦勞など、更に多くの話を聞くことができた。ホテルの部屋は、予想通り断水と停電。部屋には一本のろうそくがあるのみであった。ろうそくは案外暗いのだということがわかる。ある協力隊の方が、「ここにいると哲学を考えるようになる」とおっしゃっていたことが頭に浮かび、なるほどと思う。日本では断水と停電が同時に、そして何日も続くような経験はしたことがない。ここではそれも日常の風景。などなど考えているうちに真っ暗闇の中深い眠りについた。



煎ったコーヒー豆を潰す体験



農家の皆さんに日本茶を振る舞う

7日目 2015年8月17日(月)

- 1) 記録者:川原 恵子
- 2) 訪問先:ボンガ バルタ小学校、ゲラ ワイルド コーヒー フォレスト、コーヒー博物館
- 3) 研修内容:
 - バルタ小学校にて、学校施設見学、および、ボンガ地域の子どもとのふれあい
 - Gela Wild Coffee Forestにて、コーヒーが自生している熱帯雨林の森を散策
 - コーヒー博物館を見学
- 4) 所感:

ボンガで活動する隊員の平山さんのご尽力により、カファで最も古く1927年に設立されたバルタ小学校を訪問することができた。訪問は思いもしなかった歓迎のセレモニーで始まった。普段よりおしゃれをした生徒たちによる元気で愛らしい踊りに迎えられ、先生からは心温まる歓迎の言葉をいただいた。セレモニーの後、教室やグラウンド、実験室、図書館などの施設を見て回った。教室は一方の壁だけに1つ2つの窓がついている薄暗くて小さな部屋で、黒板と机があるので、なんとか教室だと分かるという質素なものだった。その教室で約60人の生徒がひしめき合って授業を受けているという。多くの途上国と同じように、子どもの数は年々増加しており、学校は午前と午後の2部制にしているが、先生、机や椅子などの設備、教室は不足しているとのことであった。教科書も不足していて、代々の生徒たちが使ってきた教科書では生徒数に足りないために、およそ25%の生徒は1冊の本を他の生徒と共有して使っているという話も伺った。教育環境の厳しさを実感した。

施設見学の後は、子どもたちとのふれあいの時間をとっていただき、参加教員のうち3人が事前に準備したアクティビティーを行った。まずウォームアップとして参加者全員で「与作」を歌った。あまりにも素晴らしかった歓迎の踊りに気後れを感じながらのパフォーマンスであったが、メインボーカルの先生方の熱唱する姿と歌声に、子どもたちは満面の笑みを見せてくれた。教室の雰囲気はほぐれたところで浪越先生による美術に関する活動が始まった。日本の生徒が作った旗の連なるロープに、エチオピアの子どもが夢や目標を書いた旗を付けたしていくという内容。私たちの予想に反して、多くの子どもたちが迷いなく夢や将来に対する思いを書き込んでいた。身近な職業に限られており情報も乏しいためか、書かれた職種は限られていたものの、自分の興味・関心に合わせて、将来の夢を自信をもって表現する子どもたちの姿にたくましさを感じた。続いて、私は人権に関する活動を行った。子どもの権利条約の中の「教育を受ける権利」や「言論の自由」など10の権利について、自分にとってより大切と考えるものからランキングする活動。バルタ小学校では日頃の授業では自分の考えを表現するような活動は行われていないと聞いていたので、上手く活動が進むか心配だった。活動中、自分の考えに自信がもてないのか隣の生徒のラン



<生徒たちによる歓迎の踊り>



<活動に取り組む生徒の様子>

キングを覗き込む姿が見られたものの、真剣な子どもの表情からは、自分の考えに従ってやり遂げようとする意欲が感じられた。最後に出水先生の活動。出水先生は、日本での英語の授業中に生徒たちが書いた自己紹介の手紙を現地の子どもたちに渡し、それぞれの手紙に返事を書いてもらうという活動を行った。日本の中学1・2年生にあたる年齢の生徒たちは、上級生や先生方の助けを得ながら、日本からの手紙の内容をすぐに理解し、自分自身やエチオピアのことについてスラスラと返事を書いていた。細かく見ると、綴りや文法の間違ひはあったものの表現したいことが十分に伝わる内容であった。間違ひを恐れず、自分の伝えたいことを即座に表現しようとする事ができるバルタ小学校の子どもたちは素晴らしいと感じた。3つの活動の最後には、出水先生が準備してくださり、折り紙でカエルを作った。そして、その場にいた全員で「カエルの唄」を輪唱した。最初、部屋には事前に選ばれた20名の生徒たちと先生方だけだったが、気が付くと二人掛けの机に3人の子どもが座り、子どもの数は倍の40人程になっているのが面白かった。熱気と笑顔があふれる中で、子どもたちとのふれあいの時間が終わった。

ボンガ小学校を後にする時にも、子どもたちはダンスで私たちを送り出してくれた。私たち教員もダンスの輪の中に飛び込み一緒に踊ったが、軽快な太鼓のリズムに合わせて飛び跳ねながら踊るダンスで、私は息も絶えだえとなった。



<ワイルド コーヒー フォレスト>

午後は、ゲラ ワイルド コーヒー フォレストで1時間ほどのトレッキングを行った。トゥモロコシ畑や放牧されている牛を横目に見ながら、丸太橋を渡り山道を30分ほど登り、天然のコーヒー農園と呼ばれる森に到着した。苔むす木々からなる自然林の中に自生するアラビカ豆の原木を見て、また、「手つかずの木なので、枝につく豆が少ない分、コーヒー豆にはうまみが凝縮されている」という話を聞き、改めてベレテ・ゲラのコーヒーの希少性を感じた。

その後、コーヒー博物館を訪問した。博物館は、かわいらしいコーヒーのオブジェが目を引く建物だ。その外観を見て「どんなものが見られるのだろう」と期待は高まったが、玄関から続く長く急なスロープのホールを抜け、昔使用されていた道具などが陳列されている狭い展示室を見学して、通常思い描く博物館とのギャップに驚いた。将来、コーヒー博物館の展示品が充実し、ボンガの観光に貢献するようになることを期待したい。

17日の訪問場所の計画と準備、当日の案内をしてくださったのは協力隊員の方々だった。彼らがコミュニティーの一員となって地域の人々の生活向上のために活動し、人々から信頼される存在となっていることが感じられた。彼らの活動の意義や成果を実感する1日でもあった。



<コーヒー博物館の前にて>

8日目 2015年8月18日(火)

- 1) 記録者: 浪越 綾
- 2) 訪問先: 移動日 (ボンガ→ジンマ→アディスアベバ)
- 3) 研修内容: 移動日
- 4) 所感:

今日は、ボンガからアディスアベバまで10時間かけて戻る日程であった。体調を崩されている方にとっては長旅となるので、無理をせずに移動しなければと考えた。2泊3日の電気水道がない生活は最後である。ボンガのような過ごしやすい気候でなかったら暑さと不快感でまっていたのではないかと思う。朝7時にボンガのホテルを出発し、ジンマで朝食を取った。その後、エチオピアを訪れ気になっていたジンマチェアを日本へ持って帰ろうと、JICA 専門家の佐宗さんのアドバイスのもと、地元の商店を巡った。いくつかの椅子を見比べ、店先で商品を置くために使われていた年期の入った椅子を見つけることができた。他の先生方もお気に入りのジンマチェアを見つけていた。ジンマチェアは一本の丸太から座面と脚を切り出しているもので、エチオピアに来て(特に地方で)人々がコーヒーを飲み、語らう時によく座っていた日常に使われているものである。足のデザインも様々でシンプルなカットで装飾が施されている。腰を掛ける面は座りやすいように丸く削られている。年月が経つと木に風合いもでて、エチオピアのことを思い出す愛着が湧く椅子になると思う。

ジンマからの山越えの途中で休憩を取った際に、薪を担いで山を登る女性たちと出会った。ちょうど休憩をしていたので皆さんがコミュニケーションを図り、薪を担がせてもらった。男性が担いでも相当な重さで、ぐらつく私たちをみて地元の女性は苦笑いをしていた。アディスアベバからボンガへの道のりで風景の移り変わりを見ることができた。電気も水道もない生活が、都市を離れると当たり前で、子どもたちや女性が水を運ぶ姿や、家畜に薪をたくさん積んで運ぶ少年など生活のために必要な日々の仕事をする多くの人の姿を見た。あまりにも現地の方には日常であろう光景に、一方的にカメラを向けて写真を撮影することもためられたが、コミュニケーションを図って写真に収めることには抵抗が少なく感じた。急速に発展する都市の生活を考え、この地域の人々の暮らしは10年後にはどのように変化をしていくのだろうと想像をした。発展や開発が進む中で、良いものは残していけるような価値観が育まれたらと強く思った。



ボンガの風景



ジンマチェアで休憩



薪の重さを実感する

9日目 2015年8月19日(水)

- 1) 記録者: 矢野 奈美
- 2) 訪問先: エチオピアカイゼン機構、Peacock 社 (革製品)、市内観光
- 3) 研修内容:

●エチオピアカイゼン機構 : JDS 杉本氏よりカイゼンプロジェクトの説明を受けた。

●Peacock 社 (革製品)

カイゼン実施企業の一つである Peacock 社の革靴製造工場を訪問し、実際に動いている製造ラインを社員から説明を受けながら見学した。

●市内観光

ピアッサにて開発教育教材等の購入、アウストラロピテクス「ルーシー」のレプリカ展示がある国立博物館の見学をした。

- 4) 所感:

カイゼンプロジェクトの説明を受けた際、最も印象的だったのは「KAIZEN は一つの哲学」と教えられたことだ。日本語での「改善」が「悪いところを改めてよくすること」なのに対し、「KAIZEN」は Oxford Dictionary では” A Japanese business philosophy of continuous improvement of working practices, personal efficiency, etc.” (仕事の実用性や個人の能力などを絶えず良くしていこうとする日本のビジネス哲学) と解説されている。特にトヨタ自動車のカイゼンは有名である。現場の作業者が中心となって知恵を出し合い、ボトムアップで問題解決を図っていく点が特徴だそう。日本の 5S (整理・整頓・清掃・清潔・しつけ) に倣い、Sorting (分類)、Setting in order (順番通り)、Shining (きれいに)、Sustaining (維持)、Standardizing (標準化) をモットーに、特に第二次産業のカイゼンに取り組んでいる。



<階段に5Sを掲示>

訪問した Peacock 社の革靴製造工場は、社員たちの手で整然と片付けられている印象だった。カイゼンにより作業効率が上がり、業績も向上した。社員の方が誇らしげに製造ラインのカイゼンを説明する様子からも、カイゼンがもたらしたものは企業の利益のみではなかったことがうかがえた。日本では「当たり前」な工場の風景であったが、日本人の勤勉性や向上心がこの様な形で国際協力に発展することが、日本人として誇らしいと感じた。

工場を案内してくれた社員の方に「あなたの考える『良い会社』とは？」と問いを投げかけたところ「①利益があること、②高品質を追求すること、③従業員の環境が整っていること」と即答したことが印象的だった。カイゼンという哲学の下に、自分の手で会社を良くしている手ごたえを感じているからこそその答えだろうと感じ、私も主体的に学校運営の改善に関わっていくべきだと考えさせられた。

経済成長率世界 No.1 のエチオピアの「勢い」を肌で感じる事ができた。



10日目 2015年8月20日(木)

- 1) 記録者:出水 結花
- 2) 訪問先:JICA 事務所、ランチ (ファーストフード店にて)、アディスアベバ空港
- 3) 研修内容:

●JICA 事務所での報告会

- 4) 所感:

今日は JICA 事務所での報告会だ。私たちは事前に3つのグループに分かれ、この日のために準備を進めていた。

トップバッターは浪越先生、川原先生、出水の3人。『バルタ小学校 in ボンガ小学校～国境なき教師団～』というタイトルで、現地の子ども達に授業をしてみたの発見や課題について報告した。3人とも実際に授業を行う前は様々な不安があったが、平山隊員との事前の打ち合わせのお陰でなんとか用意していたものを全て行うことができた。全体を通して共通していたのが、子ども達は活動をととても楽しそうにしていたこと、自分に自信があること、外の世界に対する関心が高いことなど。しかしその一方で、生徒間の英語力の差が大きいことや、インフラや教材の不備、普通の授業形態に問題があるのではないかということなどを指摘した。3つ目の指摘に関連しては、川原先生が現地の英語の先生から授業を改善するためにはどうしたらよいか質問され、帰国後も連絡を取り合うようである。こうして子ども達だけでなく、現地の先生にも良い影響を与えられたことは、非常に喜ばしいことである。

2つ目のグループは、山本先生、河野先生、金澤先生による、『伝えたいこと～素美人の国エチオピア～』という報告だ。山本先生は「素」という漢字から「素直・素人・素材・ステキ」をキーワードに、「生きる力=素の自分でいられること」や、「普段から生徒の“ステキ”を探している」ことなどを話した。次に河野先生は「美」しいものとして、「風景・女性・生き方」を挙げた。エチオピアの風景が日本を想わせる所もあり美しいこと、協力隊員のやりたいことをやっている生き方は美しいことなどを生徒に伝えていきたいと語った。そして金澤先生は「人」をテーマに、開発は協力隊と現地の人との信頼関係で成り立つもので、人から人へ伝えていくことこそが一番の近道であることを感じたと言う。

最後のグループ、矢野先生、梯先生、松田先生は、現地で出会った協力隊員の方々について報告した。矢野先生は、今まで国際協力をもものすごく大きなもののように捉えていたが、「良さを引き出し、外に売り出す」という面では「地域おこし」と似ていると感じたそうだ。今後も国内外の枠組みに捉われず取り組んでいきたいと話した。梯先生は、協力隊員の方々の働く姿を見て「協働(同僚性)」を感じたと言う。また平山隊員は教師ではないが、子どもとのふれあいの時間をアレンジしてくださったこと、そして大塚隊員は要請を受けた頃とは違う現状と向き合い、対応されていること、萩原隊員もまた、様々な葛藤の中で活動されていることなどから、協力隊員の「柔軟性」を感じたと言う。最後に松田先生は、この研修のテーマとしていた「学ぶことと働くこと」について、格差や貧困から脱却する手段は基本的な学力や生活経験であるとまとめた。このことを担当する定時制の生徒達に伝えていきたいと話した。

その後 JICA 職員の方々から、「新鮮だった」、「鈍感になっていた部分に気付かされた」など、ありがたいコメントをいただいた。「途上国は、実際に現地に行くと、持っていたイメージが覆されることがよくある。現地の人々と考えてやっていくのが協力隊の仕事である。」というお言葉が

特に印象に残っている。「先」に「生」と書いて、先生。私たちは、この貴重な学びを同僚や生徒に伝えていかななくてはならないと強く感じた。



プレゼンの様子



お世話になった JICA 職員の皆様と



サプライズに感涙する坂本さん



意外と近くにあったチマキ（4色！）

11日目 2015年8月21日(金)

- 1) 記録者: 松田 依子
- 2) 訪問先: アディスアベバ空港 → ドバイ空港 → 関西国際空港
- 3) 研修内容:

●無事に帰国

- 4) 所感:

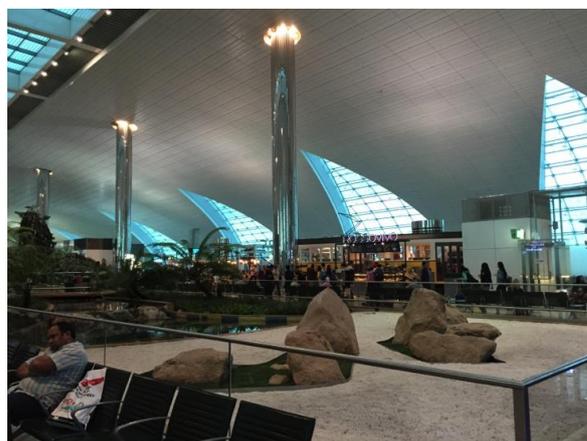
もときた道に戻る。遠ざかっていくエチオピアの大地。そこにいた時間が、まるで夢のように感じられる。約4時間の移動でドバイ空港に到着した。約5時間のトランジットをそこで過ごした。さすがは石油で経済発展を遂げた国である。深夜でも空港は賑やかだった。

ドバイから日本へ約10時間の移動。飛行機の中で出されるコーヒーのにおいを嗅ぎながら、エチオピアでの出来事や、出会った人々のことを考えてみる。コーヒーの森に住んでいるあの人たちは飛行機に乗ったことがあるのだろうか、街で出会った子どもたちはいつか「お金ちょうだい、チョコレートちょうだい」と言わなくなる日が来るのだろうか、そして日本の私たちが、経済的な豊かさの陰で、失ったものはないのだろうか……。

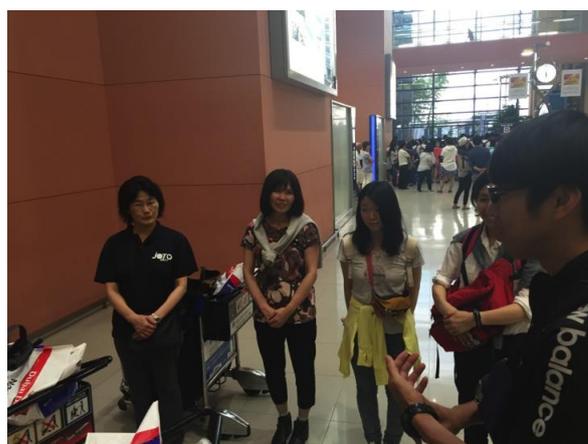
関西国際空港で、最後のミーティングをした。参加者の表情が、少しほっとしているように見えた。

帰宅して、シャワーの水圧に少し驚く。水も電気も、当たり前のように使っていたけれど、当たり前ではないんだよなあ。

教育、産業、経済、環境、文化などさまざまなことを考えるきっかけを与えてくれた、意義深い研修であった。この旅で出会ったエチオピアの方々、協力隊の皆さん、JICA エチオピア職員の皆さんにお礼を申し上げたい。そして、この機会を与えてくださった JICA 四国の職員の方々、職場の方々、家族に本当に感謝している。ありがとうございました。



ドバイ空港の様子



関西国際空港でのミーティング

同行者より

～世界はきっとどこかで繋がっている～

まだ夏真っ盛りの8月上旬、多くの学校が夏休みとなり教員がほんの一瞬だけ静けさを感じることができるこの時期、四国4県から夏の暑さよりも「熱い」想いを持った教員8名が関西国際空港に集合した。今年度は参加者の他に同行者2名、KSB 瀬戸内海放送から取材記者1名、計11名の大所帯でエチオピアでの海外研修を行った。

海外に行くことはあってもアフリカが目的地になることは殆どないのではないだろうか。きっと今回の参加者の多くも不安な気持ちを抱えながらエチオピアの地を踏みしめたに違いない。最初は緊張した面持ちだった参加者の多くが、日を追う毎にエチオピアでの生活を楽しんでいるように感じた。人々が大切にしている現地語を使用し、初めて会うエチオピア人と意思疎通を図る参加者の姿は同行者の私の目に非常に頼もしく映った。

教師海外研修の目的は、現場で活躍する教員が海外で様々な経験をし、そこで感じたこと、考えたことを帰国後の教室で子供達に還元してもらうことである。今年度の研修では、日本が JICA を通じてどのような国際協力を実施しているのか、様々なプロジェクトの視察やエチオピアで活躍する日本人専門家や青年海外協力隊員との意見交換を通じて学ぶことができた。特に、日本を出て海外で奮闘する青年海外協力隊員の活動視察や意見交換では、「なぜ協力隊に応募しようと思ったのか？」「実際にエチオピアで活動して感じることは何か？」といった多くの質問が参加者からされた。これらの質問に対する協力隊員の回答は、参加者だけでなく参加者の所属校の生徒達にとっても熱いメッセージとなったに違いない。参加者にとっても私にとっても、遠い国でしかなかったエチオピアが日を追う毎に身近な国となっていくのを感じることができた。

この研修に参加するまでは同じ四国内の教員という共通点しかなかった参加者が、この研修をきっかけに出会い、実際にエチオピアの地でお互いを高め合っている姿を見ることができ、事業を主催する JICA の一員として非常に嬉しくなった。教員同士の新たな繋がりは勿論、参加者1人1人がエチオピアで出会った人々との繋がりを感じることができた研修となった。今度、参加者が生徒とエチオピアを繋ぐ架け橋となり、将来、四国から多くの若者が世界で活躍することを期待したい。

アムセグナッロ！！！（エチオピアの公用語であるアムハラ語でありがとう！！）

JICA 四国 内山 光晴

参加者氏名

	氏名	県名	所属先	担当教科
1	浪越 綾	高知	高知県立高知南高等学校	芸術科美術
2	出水 結花	香川	香川県立三木高等学校	英語
3	松田 依子	香川	香川県立高松商業高等学校	国語
4	金澤 敦子	徳島	徳島県立城東高等学校	英語
5	矢野 奈美	愛媛	愛媛県立三崎高等学校	英語
6	山本 葉子	高知	高知県立高知小津高等学校	数学
7	川原 恵子	徳島	つるぎ町立半田中学校	英語
8	河野 通之	徳島	美馬市立郡里小学校	5年生担任・理科